

のことによつて覺醒することではなければならぬ。佛教的にはそれは體解と言うものであらう。精神の授受に於ては完全な複寫はあり得ない。あり得るとすればそれは單なる模倣に過ぎない。

宗祖の六字釋は善導和尙のそれを字訓せるものである。それは、その事(傳統)に於て重要である。併しながら、宗祖は、必ずしも善導和尙の字釋をそのまま鵜呑みにされている分けではない。つまり複寫的に受取られているべきものなら、事更な字訓釋は無用である。

そのような事が、その内容について言へば「歸ノ言ハ至ナリ」に示される。善導和尙の六字釋は言ふまでもなく別時意會通を主核として展開されている。その問題點は願行具足の如何にありとせられる。そうして、その願行具足の要請は、正に「至」の一字に懸けられたテーマである事は自明である。とすれば善導和尙の六字釋は「至」の必然性を論證することにあると言つて過言ではない。それを、宗祖は歸の一字に要約して終ふ。

「至」は絶對行の場である。それは、觀想せられた佛の行とか、或は、内在的に予定化せられた衆生の行とか言ふものではない。言ひ得べくは、佛でもなく、衆生でもないことの覺知を開く現行の場ではなければならぬ。

善導和尙の六字釋は、攝論家達の言ふ行の意味内容を逆轉的に把握する。つまり、攝論家の行は因果の行業をたゞ通れんとする爲のものゝ如きであるが、和尙は、容赦なく、この業運の前に自己を引下すことによつて、内反的に自己を佛の下へ飛躍せしめようとする。

因果の行業を遁れんとする行業も亦、因果の内に止まつているものでしかない。とすれば、そこに於て考へられる「至りつき」も、やはりその行業のうちにある到達を越えるものではない。つまり、どこにも到達はあり得ない。否、到達を語りつゝあることが抑々到達を不可能ならしめているに外ならない。何故なら到達は常に到達しないところに結び合つているからである。そこには、内在的行業の斷念が無ければならない。斷念は單に自己が諦めることではない。自己が單に佛への行善を諦めることでなく、正により一層、佛が自己への關りを斷念することゝ言ふことが惹起されなければならない。こゝに善導和尙の六字釋は成立の據點を持つていると見られる。だが併し、そのような意味からは斷念とは「無」それ自身の現前でなければならぬ。「無」が現前するとは、それが現前すると言ふ限りに於て「無」と「無」が相重することではなければならない。

「無」が「無」に相重することによつて「無」が現前する。と共に現前する、と言ふ仕方にて「無」それ自身が開かれるのでなければならぬ。現前と言ふ仕方は既に主體的なるもの止揚を意味するからである。そのような「無」の重り合ふ地平を宗祖は「至」と釋するのである。従つて、それは單に善導和尙の考へる内反的な行業を越えていると言ふべきではなからうか。

彌陀如來名號徳の書誌考檢

細川行信

宗祖の御撰述中、最も後期のものに彌陀如来名號徳一卷がある。これは大正七年夏、山田先生が松本正行寺で書寫本を發見され、それが眞撰なる事を認められると共に、その内容を一般に紹介せられた。かくて、そののち出版された中外聖典や聖教全書には本書を編入してあるが、ただ残念なことには本文中に三箇所の缺損があるため、缺文は脱葉・截断と記されたままである。このうち切断箇所は一葉十二行中、二行のみ残しているので、その缺損の分量が分るが、他の二つの脱葉箇所に至つては一體、何葉分があつたのかすら分らない。ところで先年、日野先生が岡崎上宮寺より一軸の聖教断簡を發見され、それが正行寺本からの断簡であろう事を紹介せられた。ここに私は兩者を比べ、右の断簡が脱葉箇所のものである事を確めると共に、以前知り得た正行寺本の丁付け書き入れより、その脱葉の分量を考定し、更に断簡が元一葉であつた事などより、どの部分の脱葉に該當するかを検討し、私なりの結着を得た。今、その結論だけを示せば次の如くである。

- ① 脱葉箇所は第七葉、第十・十一葉である。
- ② 断簡は右の脱葉中、第十一葉に該當する。

往生要集における念佛と諸行

宮 城 顛

『往生要集』大文第八念佛證據門において源信は、「一切善業各々有利益、各々得往生。何故唯勸念佛一門。」餘行寧

無勸進文耶。「諸經所說隨機萬品。何以管見一執一文耶」の三問をもつて、往生之業に念佛を本となす證據を明らかにしている。この三問が内容とするところは、源空が、第一問答について難行易行對。少分多分對。第二問答について因明直辨對。自說不自說對。攝取不攝取對。第三問答について隨宜盡理對と六對に配對したところのものである(往生要集註要)。しかるに第二少分多分對は第一難行易行對に「況復」と附加的に開かれたものであり、第二問答はその少分多分對をうけての補說、更に第三問答は念佛の易行性が決して劣を意味するものでないことを明すものであつて、結局六對の歸するところは、念佛の易行という一點にあることが知られる。

ところで今源信がその經證として擧げるところのものは『木槨經』である。源信が念佛というとき、その眞意が稱阿彌陀佛名にあること、大文第四正修念佛門の文意によつて明らかなること、大文第四正修念佛門の文意によつて明らかなること、大文第四正修念佛門の文意によつて明らかなること、十八願意に徹入することによつて與えられた確信であつた。しかるに今、稱三寶名を説く『木槨經』をもつて念佛の易行たる經證とするのは何故か。そのことを理解するために、念佛の一道によつて自ずと撰捨された諸行を『往生要集』の上にてみるに、源信はこれを六波羅密以下、不染利養にいたる十三行に總結して擧げ、しかも前十二行に對しては全く何ら註釋をも加えず、ただ最後の不染利養にのみ「如是貪求利養者既得道已還復失」云々と説く『大集經』等の文を擧げ、自から「則知。出離最後怨莫大名利者也」と註している。それは、内實はともあれ形式的には、たとえ我執的情熱をもつてでも、定め